厳しい寒さ、偏見と闘う

ルポ 寿越冬'17～'18 (下)

神奈川大4年の高林香穂さん(22)が人生で初めて出会ったホームレスは20代と思われる女性だった。

昨年12月29日。午後10時を回った横浜駅東口は、ふるさとや行楽地に向かう帰省ラッシュがようやく過ぎ、静かな時間を迎えた。

人通りがない駅ビルのテラスの一角に、ボブカットの女性が1人、大きなかばんや防寒具を置きマットを敷いて座っていた。そばには背表紙にシールが張られた小説が積まれていた。図書館から借りたのだろう。

旅行者ではない。実は、3年前からこの場所で寝泊まりしていた。

日雇いの仕事がなくなり行政機関が閉庁する年末年始。寿越冬闘争では横浜駅周辺や寿・関内地区などでホームレスを見回る夜間パトロールを続けている。寒さ厳しい中で命をつなぐために声を掛け合い、温かいスープや毛布、防寒着を必要とする人に渡す。援護を求める人たちを一次的に受け入れる簡易宿泊所もあり、さまざまな相談に対応できる態勢を整えている。

この女性は最近まで支援者との関わりを避け続けてきた。それが、私が野菜スープを持ってきたことを伝えると、「ありがとうございます」と両手で器を受け取ってくれた。お代わりもした。あまり積極的に話さない女性が打ち解けた姿勢を示したことに、安堵が広がった。

パトロールに初めて参加した高林さんは、少し離れた場所に立ち尽くしていた。友人との買い物やアルバイトで毎日のようにに通るエスカレーターのすぐ近く。衝撃だった。

「ホームレスって、おじいさんがどこかの隅で寝ているイメージしかなかった。若い女性が、しかもこんなに身近にいるとは」

◆

寿越冬闘争実行委員会によると、この新年を路上で迎えたホームレスは横浜駅周辺で25人（うち女性2人）。寿・関内地区は51人（同1人）の計76人（同3人）だった。

約30年にわたり支援を続ける実行委の高沢幸男事務局長(47)によると、全体の8割近くが野宿生活を続けて1年以上になる。日雇い労働をする人たちもいるが、稼ぎは少なく食べるのがやっと。

「凍える路上で生き抜くのは並大抵の生活スキルではできない。悠々自適のように見えるかもしれないが、怠けていてできるものではない」と高沢さん。

野宿する場所は定まっている人たちが多い。関内地区では横浜スタジアム近くに約30人が寝泊まりしている。横浜駅周辺ではタクシー乗り場の片隅や、バスターミナルのひじ掛け付きベンチの上でも横になって休んでいる。道路に挟まれた植え込みの中にテントを建てて暮らす男性も。5～8人がいる横浜駅コンコースは暖房が効くが終電後に閉ざされる。深夜に毛布やかばんを持って屋外のテラスなどに移り、夜を明かす。

年末年始は人の出入りが激しくなる。新たに野宿に加わる人もいればホームレスへの嫌がらせも起きる。高沢さんは1992年12月28日夜、横浜駅構内で寝ていたホームレスを引きずり出す駅員の姿を目撃した。

初日に見掛けた女性はそれ以降、荷物ごと姿を消した。気掛かりな人は何人もいる。だからこそ、年の瀬の夜間パトロールが欠かせない、と強調する。

◆

パトロールに長年加わる支援者の中には、寿地区の簡易宿泊所などで暮らす人や、生活保護を申請したことがある人たちもいる。茨城県土浦市で電話工事会社を経営する出本政史さん(47)は39歳でホームレスとなった経験がある。

広島県で家庭を持ち、電話工事業の個人事業主として日々働いていた。取引先の一つが暴力団から借金したことがきっかけでトラブルに巻き込まれた。さまざまな脅しを受けて事業が続けられなくなり、会社を畳んで妻とは離婚。その年の暮れ、行く当てもないまま横浜駅に初めて降り立った。

野宿できる居場所を交番に教わり、横浜公園にある横浜スタジアムでホームレスとなった。周りにいる先輩たちが野宿のすべを教えてくれた。最初の夜は、とても寒かったことを覚えている。

市の生活自立支援施設「はまかぜ」で年を越した後、ハローワークで電話工事の求人を見つけてがむしゃらに働いた。「ホームレスだったころの、さげすまれ、見下された感覚は忘れない」。人生のどん底からはい上がろうともがいた。

新たな取引先に恵まれ、会社を興すために茨城県に引っ越した。年末年始は片道4時間かけて車で横浜に戻りホームレスを支える。

ホームレスは自己責任という意見が聞かれるが、ごく普通の暮らしをしていてもそうなる可能性は誰にでもある。出本さんは「自らの意志があれば、安定した生活が再び営めることを伝えたい」と語る。

◆

複雑な事情を抱え込み、人との関わりや支援を拒むホームレスもいる。

そんな男性が2日夜、横浜駅東口でおなかが痛いと身ぶりで訴えた。決して言葉を口にしないが、表情がつらそうだ。3日夜、胃薬を持っていくと既に回復した様子だった。

温かいスープをおいしそうに食べる姿にうれしくなった私は「お代わりはどうですか」「遠慮せずにどうぞ」としつこく勧めた。

何度も断っていた男性は、最後は同じ器にお代わりを入れるように指さした。私はたっぷりとスープをよそった。

その後、長年支援に携わる「オカさん」と呼ばれる男性がパトロールの全員を呼び集め、こう指摘した。

「気を使わせてしまったね。いったん断ったのだから、相手の気持ちに寄り添ってあげなきゃ」。良かれと思い、善意を押しつけてしまった自分を恥じた。

毛布もそうだ。両手に持てる最低限の荷物にまとめている人がほとんど。「余計な毛布はありがたいが扱いに困る。持ち歩くと警官に呼び止められる」。ギリギリの野宿生活。周囲とトラブルを起こさないように、人の目を気にして生きていることを知った。

◆

「越冬闘争って、何と闘うの？」。学生から聞かれると、高沢さんは「生きにくい社会」と説明する。スープと毛布は、凍てつく路上で孤独な闘いを続けるホームレスの体を温め、励ますものだ。

それ以上に、ホームレスと目線を合わせ、心を通わす体験が大切だと高沢さんは語る。「支援に協力したい」とどこか傍観者風だった女子学生が、「自分たちの問題として関わりたい」と活動にのめり込む姿も見た。寿越冬闘争での活動を通して、ホームレスへの無関心から無理解、そして偏見につながる社会を変えることができると信じている。

（三木　崇）

温かいスープが入った鍋と毛布を持ちホームレスを訪ねる夜間パトロール＝3日午後10時55分、横浜駅東口